

話題提供 2：太田垣明子

「話しことば教育について - 年少者日本語教育の実践の場から - 」

太田垣 ただ今御紹介に預かりました大阪インターナショナルスクールの太田垣明子と申します。どうぞよろしくお願いいいたします。私はこれから勤務校であるインターナショナルスクールでの日本語教育の実践例を織り交ぜながら、話しことば教育について少しお話しさせていただきたいと思います。

インターナショナルスクールにおける日本語

インターナショナルスクールで日本語を学ぶ学習者というのは、基本的に英語を第一言語としておりまして、日本語は外国語科目に位置づけられるわけですが、日本に住んでいるという環境からほとんどの学習者にとっては第二言語として位置づけられております。また同時に、生活に必要な言語ということで、生活言語としても位置づけられております。そういった学習者なのですが、学校の外でも中でも日本人との接触が多ければ多いほど耳から日本語を学び習得をしていきます。従って、自然な発音や表現も一緒に来た親よりもずっと早く習得し、比較的短い期間日常生活に必要な会話能力を身につけていくわけです。このように、一見早い上達を見せていく学習者たちなのですが、ある段階におきまして発達が止まってしまうことがあります。また、さらにその後あるレベルに留まったままという状態が長期間続くことがあります。こういった学習者層で特に中学生を半年ほど教室の外と中の両方で観察してみました。いくつかの特徴が観察されました。一つは一見スムーズにコミュニケーションを行なっているように見えるのですが、その受け答えをメモをとって聞いてみますと、単なる短い文や句を並べているだけであるとか、やたらと相手の言ったことに対しての繰り返しが多いということです。それから、二つ目として、発話の構文がとても単純なものであったり、語彙も日常生活用語の域を脱していない点が見られました。このような学習者は教室内ではスピーチやディスカッション時に、自分の意見をまとめて述べるのが苦手な場合が往々にしてあり、抽象的な話題に関して話し合いを提供するとあまり発言しないということも観察されました。

インターナショナルスクールの中学生は、日本語のクラス以外の言語環境を考えてみますと、構文的にも語彙的にも複雑で抽象的な話題の日本語に接する機会がほとんどないわけですね。大抵は同年代の日本人と普通の日常会話を行うとか、日本のテレビ番組を通して、彼らなりの日本語をインプットしていくわけなのですが、どういうテレビを見ているかをクラスで聞いてみますと、高校生になるとニュースを見たりするらしいのですが、中学生の段階ではマンガやバラエティー番組、歌番組が中心だということです。従って、語彙的にも限られてくることがわかりました。

第二言語習得の研究に置いて、第二言語学習者の言語能力の発達を促すためには、その言語における次の段階のインプットやそれを理解して自分のものに取り込むこと、さらにその取り込んだものを自分のことばとして表出する、アウトプットすることが大切であるという理論があります。その論に沿って考えていきますと、私の資料の表1、これは岡本

1985 からの引用なのですが、この表 1 の右側の「二次的ことば」、つまり現実を離れた場面でことばによって文脈が成立し、それから不特定の一般者を対象として相手がいるのではなくて、自分から皆にことばを発するという特徴を持つ「二次的ことば」におけるインプットやアウトプットが今述べてきた学習者には、本当に少ないということがわかりました。このような観点から、正確に自分の考えを伝える力を伸ばしていくために、日本語のクラスでまず話しことばを見直すべきではないかと思い、これからお話しをする実践例を昨年試みました。

話しことば教育の実践例

指導に当たりましては、資料の 2 番（資料 1）に挙げました 5 つの点に留意いたしました。1 番がテーマの選び方、2 番が十分な情報を事前に与えること、3 番が四技能を統合した活動、4 番が日本語母語話者との相互交渉の場を与えること、5 番が抽象的思考を口頭で発表する機会を与えることです。

これについて、もう少し詳しくお話ししますと、今日は現場の先生がたくさんいらっしゃるのでものご存知だと思うのですが、成人の日本語学習者に比べまして、年少者の日本語学習者は非常に日本語学習の動機が低いです。ですから、やはり動機を高めるために、別の教科で学習しているテーマなどを持ち込んで、できるだけ動機を高める、興味を引き付けるといって、そういったテーマの選び方が必要なのではないかと思います。

それから、2 点目の事前に十分なインプットを与えることに関しては 2 つの場合が考えられます。先ほどの足立さんの発表にも関連することなのですが、第一言語においてその知識や概念が既にある場合とない場合と 2 つの場合が分けられると思います。1 つは、第一言語に知識や概念がある場合ですが、この場合は第二言語でこういうふうに言うのですよ、こういうような表現があるんですよということを学習することで、そのまま第二言語の表現に繋がっていきます。もう一つの方は、第一言語における知識や概念がない場合で、この場合はその知識や概念の説明から入っていく必要があるかと思われま

それから、3 点目の四技能を統合した活動に関してですが、これは話しことばというのはそれだけが独立しているわけではなくて、もちろん必要な情報を得るのに聞いたり、読んだりする活動、それから自分が考えていることを整理する意味での書く活動というのは不可欠だと思います。ですから、これら 4 つを切り離して指導することはできないので、できるだけ統合した活動を目指しました。

4 点目の日本語母語話者との相互交渉ですが、場と相手に応じた日本語伝達能力を身につけるには、同じ年代だけではなくさまざまな年代の日本語母語話者との相互交渉が必要だと思われま

す。ですから、上の年代の方とお話しをすることによって、こういうふうな対応をする必要があるということも学べると思われま

そういう意味で、さまざまな年代の日本語母語話者との相互交渉を留意しました。

5 点目として抽象的思考を口頭で発表する機会を与えることですが、これは先ほども述べましたように、年少者のクラスの外での日本語の会話の内容の範囲は非常に限られております。状況も明らかで具体的な話題が多いわけですから、抽象的な話題について述べさせたい場合、クラスの中で教師、指導者が意識して作っていく必要があると思われま

す。

インターナショナルスクールではこれはもう全教師暗黙の了解になっておりますので今まで申し上げた5点に挙げなかったのですが、指導に入る前に何故こういうことをするのか、何故こういう指導をするのか、という説明を生徒に事前にしておくということがインターナショナルスクールの教師には常に要求されております。これはとても大切なことであり、一つの動機づけに繋がっていくのではないかと思います。

日本語のクラス構成

実践例のクラス構成についてですが、まず学習者の背景をお話いたしますと、英語圏の学習者2名、アジア圏の学習者1名の3名ですが、3名とも日本人との接触が多く日本語の日常生活レベルのインプットはかなりあります。それから、彼女たち3名の第一言語、つまり英語の方の言語能力の影響を考慮する必要があると思ひまして英語の成績を調べましたところ、3名とも非常に上位に位置しており、中3の段階でシェークスピアの『ロミオとジュリエット』などを読んで、実際に授業でそれについて討論したり、あるパートを演じたりするような非常に高い第一言語の英語力を持っているということでした。また、話しことば指導を考える際に、学習者の性格の影響も考え英語での普段の会話や授業での参加の様子も観察してみましたら、3名とも積極的に発言するタイプでした。ただ、日本語においては最初に申し上げたような特徴を持つ学習者ということで、結局抽象的で複雑な伝達能力がまだないので、それを伸ばすための実践例を一番から十番の手順に沿って行いました。

観察された学習者の変化

実践を通じまして、生徒の方から聞かれました感想はそこに書いてある通りなのですが、やはり目上の日本人と話すのに必要な話し方を、これはたぶん敬語のことを意味していると思うのですが、もっと勉強したいという意見が聞かれました。また、私の方で学習者の変化を資料1に4つ挙げております。つまり、身振りや手振りに頼らずに、できるだけことばに頼って自分の意見を述べるという変化が見られました。それから、この諸活動の中でスピーチやプレゼンテーションがあるわけなのですが、その際に自分で英語または日本語でメモを作ってきて、論理的な構成、つまり導入それから本論、そして自分の意見を述べるという論理的な構成に注意を払った談話の展開が見られました。また、インタビューの際に、インタビューしてきたテープを後でおこして聞いたのですが、実際に目上の方と話をする際にどうしてもことば足らずで、向こうの方が理解できない時に、もう少しわかりやすいことばで言い直したり、具体的な例を挙げるなどして相手に理解させるためのさまざまなストラテジーを使う姿勢がインタビューのテープで観察されました。それから、全体的なこととしまして、それまでは割と先生に対しても「そうだ。」とか「うん。」などのいわゆる「だ体」というか、日常会話体の会話が多かったのですが、この指導以後、「です・ます調」に注意を払ったりするという、フォーマルな話し方に対しても意識がだんだん高まってきたように思われます。

最後に、問題点として今後取り組んでいく課題を 2 つ挙げました。1 点目が話しことばの評価方法の見直しということで、第二言語学習者の場合、話しことばのゴールが各学習者によって異なります。今回の実践の過程を通じましても、3 名の内の 2 名は割と自分でやっていたのですが、1 名は指導の過程ですごく神経質になりまして、スピーチやプレゼンテーションの前の日に自分で一度練習したテープを持ってきて、「先生、発音を細かくチェックして下さい。」というふうに言ってきました。そういったニーズが学習者によって各々異なる日本語教育において、評価がどういう意味を持つのかな、と今回考えさせられました。それから、もっと大きい問題になりますと、「第二言語ができるようになる」というのは一体どういうことなのかなということも、また後で皆様からコメントいただけたらと思います。

2 点目として、話しことばの指導に必要な学習項目の検討ということで、今回は中級の学習者に焦点を置いたのですが、これは中級だけやってどうなるというわけではなく、初級から中級、中級から上級というもっと広い視野から見た話しことば指導を考えていく際に、そこら辺をうまく橋渡しするための学習項目、シラバスの検討をする必要があるのではないかと。その際に、日本の国語教育や外国における言語教育からの知見を参考にできないかなあというふうに思い、今日出席させていただきました。以上、一つの私の実践例を基に話しことば教育について述べさせていただきました。以上です。

吉野 太田垣さん、ありがとうございました。非常に具体的でわかりやすいお話を伺いました。先ほどと同じように質問がございましたらお願いいたします。足立さんとは、学習者も違いますし、指導なされた内容も違うわけですが、重なる点もあるかと思えます。いかがでしょうか。よろしいですか。太田垣さんの方でコメントを後でいただきたいということをお願いしましたが、今日午後の発表で外国における言語教育について御発表なさる先生方もいらっしゃると思いますので、後ほどコメントをいただけたらと思います。それでは、続きまして 3 つ目の発表に移りたいと思います。柳澤さんに「非日本語母語話者である生徒の日本語獲得と言語生活環境に関する事例報告：太田市立小学校の場合」ということで、御発表をお願いいたします。

表1 一次的事ことばと二次的事ことばの比較（岡本、1985 より）

形 態	一次的事ことば	二次的事ことば
状 況	具体的現実場面	現実を離れた場面
成立の文脈	ことばプラス状況の文脈	ことばの文脈
対 象	少数の親しい特定者	不特定の一般者
展 開	会話式の相互交渉	一方向的自己設計
媒 体	話しことば	話しことば・書きことば

資料1 話しことば教育の実践例の紹介

中級の学習者（日常会話を大体こなせる程度）を対象にした教室活動を挙げる。指導にあたって、以下の5点に留意した。

- (1) テーマの選び方
- (2) 十分な情報を事前に与えること（語彙・表現の育成 / 知識・概念の育成）
- (3) 4技能を統合した活動
- (4) 日本語母語話者との相互交渉の場を与えること
- (5) 抽象的思考を口頭で発表する機会を与えること

<実践例の紹介>

テーマ：教育（教育制度、学校の制服） / 時間：週4時間×3時間（計12時間）

対象：中級レベル（学習経験300時間程度 / 漢字500字程度の読みが可能）

英語圏学習者2名、アジア圏学習者1名（3名とも9年生女子）

教育に関する語彙を、意味の確認と使い方を中心に学習する。短文を作成し、発表する。

日本の教育制度について書かれた文を読み、教師の質問に口頭で答える。

文を読んでわかったこととすでに知っていることをもとに、日本の教育制度についてメモを作成し、発表する。

自分の国の教育制度について調べ、各自クラスでスピーチする。また、クラスメートや先生からの質問に答える。

制服に関する新聞記事（読者の声欄で、制服への賛成意見と反対意見が全部で5つ、色々な年代の人からそれぞれの立場で挙げられているもの）を読み、各投書が賛成の立場か反対の立場かを読みとり、発表する。

自分の国の状況との比較検討を通じて、制服に対する自分の意見を述べる。その際、かならずなぜそう思うかという理由も述べる。

制服について、日本の中学生と中学校の先生を対象にインタビューを行う。

インタビューの録音テープを聞いて、その結果をまとめる。

インタビューの結果およびそれに対する自分の意見をクラスで発表する。

教師との面談において、本テーマの諸活動に関する感想や困った点を述べる。（その間、他の生徒は「教育制度」または「学校の制服」に関する作文を書く。）

* 下線部が、「話す」ことに焦点をあてた活動として位置づけられる。

授業は原則として日本語で行ったが、言葉のニュアンスの違いや基本概念で理解に困難を示す学習者には、L1である英語を媒介として、説明を加えることもあった。

以上の実践に対する学習者の変化として以下の点が認められた。

- ・身振りや手振りに頼らずに、言葉で自分の意見を述べる。
- ・箇条書きのメモをもとに、論理構成（序論 本論 結論）に注意を払った談話の展開。
- ・日本語母語話者に自分の質問を理解させるための様々な方策を使う姿勢。
- ・人前で話すための言葉遣いや「です・ます」体を意識した話し方。

参考文献

内田伸子(1996)『ことばと学び』金子書房

岡本夏木(1985)『ことばと発達』岩波書店

バーンスタイン,D.K.編(1994)『子供の言語とコミュニケーション - 発達と評価 - 』
東信堂